

中国語初中級における作文授業の試み：アウトプット練習法を取り入れて

謝, 平
福岡大学人文学部

伊伏, 啓子
福岡大学人文学部

<https://doi.org/10.15017/6770263>

出版情報：基幹教育紀要. 9, pp.141-155, 2023-02-24. 九州大学基幹教育院
バージョン：

権利関係：© 2022 Faculty of Arts and Science, Kyushu University. All rights reserved. The publisher holds the copyright on all materials published in its journals except special issues, whether in print or electronic form, both as a compilation and as individual articles. All journal content is subject to "fair use" provisions of Japanese or applicable international copyright laws.



中国語初中級における作文授業の試み —アウトプット練習法を取り入れて

謝 平^{1*}, 伊伏 啓子¹

¹ 福岡大学人文学部, 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8 丁目 19-1

An Attempt for Teaching Composition in the Pre-intermediate Levels of Chinese : Incorporating the Output Practice Method

Ping XIE^{1*}, Keiko IBUSHI¹

¹ Faculty of Humanities, Fukuoka University, 8-19-1 Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka 814-0180, Japan

*E-mail: xieping@fukuoka-u.ac.jp

Received Oct. 29, 2022; Revised Nov. 28, 2022; Accepted Nov. 28, 2022

The acquisition of a second language refers to the acquisition of the four skills of language behavior: listening, speaking, reading, and writing, with "listening" and "reading" being input activities, while "speaking" and "writing" being output activities. However, Chinese language education in Japan has few output classes, and students are unable to apply Chinese to real-life situations. In a composition class titled "Chinese Expression Methods," which the author taught at Fukuoka University in 2021, the author attempted to introduce an output practice method by incorporating both "writing" and "speaking" so that students would be actively engaged in learning. This paper introduces an example of the output practice and discusses the effectiveness of the output teaching method based on the results of a questionnaire from the students. The questionnaire survey revealed that all students felt that the output practice activities discussed in this paper were effective in improving writing.

1. はじめに

第二外国語の習得と言えば、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」という言語行動の四技能を身につけることを指しており、「聞く」と「読む」はインプット活動に当たり、「話す」と「書く」はアウトプット活動になる。しかしながら先行研究¹でも指摘されているように、日本における中国語教育は文法訳読法が中心になっており、アウトプットの授業が少なく、現実の場面では中国語を応用することができないのが現状である。

以上の問題を踏まえて、2021 年度に福岡大学で開講した「中国語表現法」という作文の授業では、学生に能動的に学習に取り組んでもらうように「書く」と「話す」の両方を取れ入れ、アウトプット練習法の導入を試みた。本稿はそのアウトプットの実践例を紹介し、学生からのアンケート結果によりアウトプット指導法の効果を考察するものである。

2. 授業の対象と目標

2.1. 授業対象のレベル

2021 年度に開講した「中国語表現法」は、週に 4 回の中国語の授業を一年間受けて、初級を終えたばかりの人文学部東アジア地域言語学科中国コースの二年生 25 名を対象にした授業である。

本稿で実践対象の学生は、一年次（2020 年度）では、共通教育科目の「中国語 I AB」と専門科目の「中国語入門」をそれぞれ週に 2 回受けており、学んだ語彙は 600 語ほどであり²、HSK3 級レベルの語彙数に達している³。つまり、初級段階から中級段階に移行する初中級レベルの学生である。

2.2. 授業目標の設定

HSK の各レベルに一致する外国人向けの中国語教育に関する指導要領《国际汉语教学通用课程大纲》⁴では 3～4 級の「書く」技能の到達目標を以下のように定めている（以下の表 1 参照）。

表 1 《国际汉语教学通用课程大纲》3～4 級の作文の到達目標

レベル	語彙数	「書く」技能の到達目標
三級	600 語	能用简单的词语填写或描述与个人生活密切相关的信息，能用最基本的词语或句子就一般场合下熟悉的话题进行简单的书面交流，能组织简单的段落。其中包括： 1. 能用简单的词语填写、回答或介绍个人生活密切相关的信息； 2. 能用最基本的词语或句子就一般场合下熟悉的话题进行简单的书面交流； 3. 能就一般社交场合下熟悉的话题书写简短的信息； 4. 能记录、抄写或填写事实性或说明性信息； 5. 能组织简单的段落叙述或描述个人生活、家庭生活及学习生活； 6. 能编写小故事、撰写简单的计划等。 （《国际汉语教学通用课程大纲》p.12） 〔簡単な言葉を使って、個人の生活にかかわる情報を記入したり、説明したりすることができる。最も基本的な言葉やセンテンスを使って普通の場面によく出てくる話題について書面によるコミュニケーションを取ることができ、簡単な段落を組み立てることができる。以下のような内容が含まれる： 1. 簡単な言葉を使って個人の生活にかかわる情報を記入したり、答えたり、紹介したりすることができる。 2. 最も基本的な言葉やセンテンスを使って、普通の場面によく出てくる話題について簡単な書面によるコミュニケーションを取ることができる。 3. 普通の社交的な場面に出てくる話題について短い情報を書くことができる。 4. 事実に基づく情報あるいは説明的な情報を記録したり、書き写したり、記入したりすることができる。

5. 個人の生活や家庭及び学校生活について簡単な段落を組み立て述べたり、描写したりすることができる。
6. 短い物語を作ることができ、簡単な計画を書くことができる。]⁵

四級	1200 語	能就基本的日常学习、工作或社交话题进行描述，能按一定格式书写简短的篇章，传递或表达恰当的信息。其中包括： 1. 能根据所读或所听材料做简单的记录，概括出大意； 2. 能就个人经历或熟悉的有关学习、工作或社交话题做简单的成段描述，语句基本通顺，表达基本清楚； 3. 能填写简单的工作表格和计划书等； 4. 能根据简短的口头报告或参考资料整理出简单的笔记； 5. 能在两事物之间进行对比描述； 6. 能撰写日记，语句基本通顺，表达基本清楚，且具有一定的连贯性。
----	--------	--

(同上, p.18)

[日常的な学習生活や、仕事あるいは社交的な話題について詳しく述べることができる。決まった形式で短い段落や文章を書くことができ、適切に情報を伝えたり書いたりすることができる。以下のような内容が含まれる：

1. 読んだものあるいは聞いたものを簡単に記録し、大意をまとめることができる。
2. 個人的な経歴や勉強、仕事あるいは社交について簡単に段落を組み立てて述べることができる。文章の筋が基本的に通っていて、言語表現が大体明白である。
3. 簡単な仕事のスケジュールと計画などを記入することができる。
4. 短い口頭の報告や参考資料に基づいて、簡単なメモを取ることができる。
5. 二つの事物を比較して説明することができる。
6. 日記を書くことができ、話の筋が基本的に通っていて、言語表現も大体明白で、ある程度一貫した筋道がある。]

《国际汉语教学通用课程大纲》では、1～2級の「書く」目標は、簡単なフレーズとセンテンスを書くことであり、3～4級は短い段落の文章を書くことができるとしている。上記の表1からわかるように、3～4級の「書く」テーマについては、主に勉強や人間関係など個人の日常生活に関するものになっている。授業対象の学生は一年次で単文の翻訳練習などをよく行っていたが、文脈のある単文や一つのまとまった段落を書く練習はほとんど行っていない。そこで、上記の表1の3～4級の目標を参考にしながら、授業の目標を以下のように設定した。

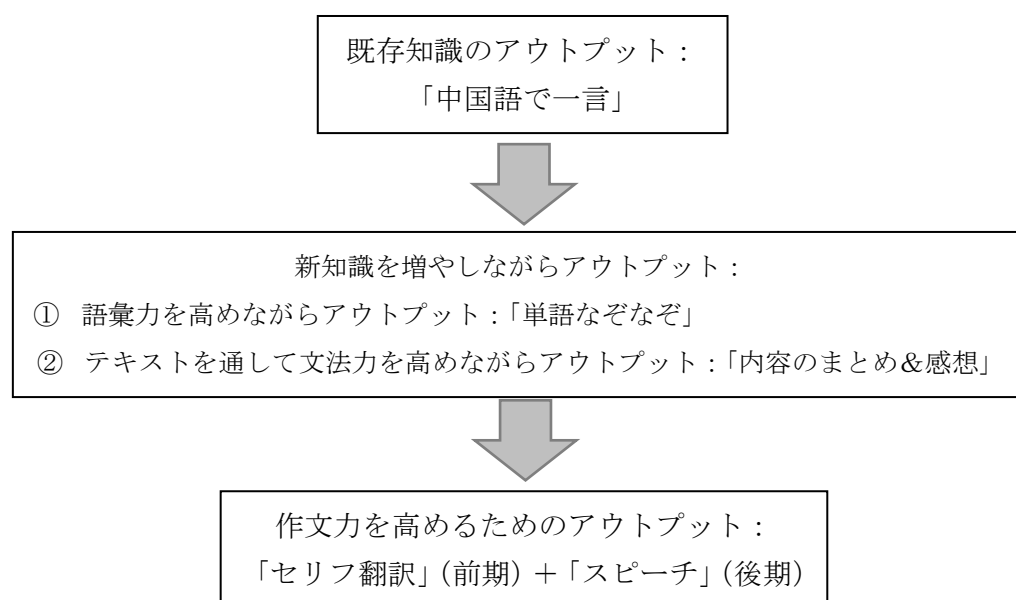
- ① 常用の語彙を増やし、HSK4級程度の語彙量に達すること⁶。
- ② 積極的に自分の考えを中国語でアウトプットできること。
- ③ 学んだ文法を活用できるように、正しく、順序良く伝え、文章表現の基礎を身につけること。

2.3. 授業の流れ

鈴木・齋藤（2016）によれば、アウトプットには少なくとも「気づき」、「仮設生成と検証」、「メタ言語的熟考」、「自動化」といった四つの機能がある⁷。「書く」技能は、「話す」技能と同じく、言語習得において不可欠なアウトプット能力の一つである。しかし、どのようにすれば最大限に学生のアウトプットの質を向上することができるのであろうか。また、この際アウトプットの機会を多く与えることが重要であるが、既存の知識に頼るだけではアウトプットも限られてしまうので、既存の知識を固めながら、新しい知識を増やすこともとても重要であると考え。特に作文力を身につけるには、語彙力と文法力だけではなく、自分の考えを正しく相手に伝える論理的な思考力も不可欠なのである。

そこで、2.2 でも述べたように、授業の目標は「語彙力」、「文法力」という基礎的な能力を身につけさせた上で、まとまった文章を書くことができるように作文力の向上を目指すとした。まず、語彙力を身につけるため、中国語の基礎語彙を覚える必要があると考え、HSK4 級の語彙表を Moodle にアップロードして、毎回の使用箇所を明示した。また、文法を固めるためのテキストも Moodle にアップロードし、事前に予習するように指示した。そして、作文力をアップするための翻訳（前期）とスピーチ（後期）の課題も Moodle を使用して事前に提出してもらった。また、作文の授業であるからと言って、「書く」に偏るのではなく、全面的にアウトプットしてもらうために、「書いて話す」あるいは「話して書く」90 分の授業を主に「既存知識を活性化する」と「新知識を獲得する」、「作文力を鍛える」の三段階に区切って、以下の図のように授業のデザインを考えてみた。

図1 授業の三段階



授業の流れおよび各活動の実践例の概要と具体的な時間の配分は以下の通りである。

表2 授業の流れと実践例

授業の流れ (活動の時間)	活動の概要
1. ウォーミングアップ (15 分程度)	・「中国語で一言」 ① 点呼の時に、自分に起こったできごとについて中国語で一言話す。また、その発言に対する教員の質問に素早く答える。 ② 学生は、自分の話す内容だけでなく、先生の質問を予測して、話題に関連する単語や表現を事前に調べておく。 ③ ほかの学生は発言者と教員のやり取りをノートにメモする。 ④ 授業後に発表した内容や聞いた内容を書き直す。
2. 語彙力アップ活動 (5 分+15 分程度)	・「書き取り・単文の翻訳練習」 ① HSK4 級語彙表の指定箇所を事前に勉強しておく。 ② 授業では、指定の箇所から単語を選んで書き取りの練習をする。また、指定箇所から関連の表現を選んで、日本語から中国語に訳す練習をする。 ・単語「なぞなぞ」 ① 上記の活動と同じく、HSK4 級語彙表の指定箇所を事前に勉強しておく。 ② 指定の箇所から単語を二つ以上選んで、それらの単語についての「なぞなぞ」を作る。 ③ 授業中に口頭で発表し、ほかの学生に「なぞなぞ」を解いてもらう。
3. テキストの勉強 (5 分+25 分程度)	・「質疑+内容のまとめ・感想」 ① テキストを事前に予習しておく。 ② 教員は学生の理解できない箇所についての質問に対して説明する。 ③ 事前に考えたテキスト内容のまとめと感想を中国語で順序よく言う。 ④ 学生のまとめに不自然な表現があれば、教員が説明する。 ⑤ 授業後にまとめと感想を書き直す。
4. 作文練習 (22 分程度)	・「セリフ翻訳」(前期) ① 毎回の授業の一週間前に、アニメから一分間程度のセリフを Moodle にアップロードし、発話の状況や文脈に合った相応しい表現を考え、授業の前日までに中国語に翻訳しておく。 ② 授業中に答え合わせをする。学生の文法に合わない表現だけでなく、文脈に合わない不自然な表現などを指摘し、正しい表現について説明する。 ③ 授業後に訂正し、書き直す。

・「スピーチ+質問応答」(後期)

- ① スピーチの話題と発表順番を事前に決めておく。
 - ② 発表者が授業の前日までに文章を書いておいて、Moodle にアップする。
 - ③ 授業中に発表を行い、不自然な表現があるかをほかの学生に確認してもらう。
最後は教員がまとめて説明する。
 - ④ ほかの学生は内容について聞きたいことを考えて、中国語で質問をする。それに対し、発表者は中国語で答える。質問と答えの表現が不自然な場合は、教員が訂正する。
 - ⑤ 時間が足りないときは、質問と発表者の答えを Moodle に書き込んでもらい、教員がチェックし、コメントする。
 - ⑥ 授業後に訂正箇所を確認した上で、書き直す。
-

5. まとめと課題
(3 分程度)

復習と予習についての宿題を課す。

3. フィードバック

3.1. アンケート調査の概要

全体の授業についての「授業アンケート FURIKA」では⁸、以下のように、「語彙力」、「文法の応用力」、「表現力」、「会話力」、「作文力」を高めることにつながるとのコメントが多かった。

- ・ あるテーマに関する文章を自分でつくることができるようになったり、多くの単語を覚えることができました
- ・ 中国語の文法、学習した文法の応用ができました
- ・ 今まで習った文法・単語を頑張って使うようになりました。積極的に使うことが言語上達の秘訣なので後期も引き続き頑張りたいです
- ・ 少し難易度の上がった話し言葉を学んだ。基礎的な文法はあったが、応用的な文法がとても多かった
- ・ 日本語の文章をいかに自然な表現で中国語に翻訳できるかや、ちょっとしたニュアンスの違いをどのように分かりやすく翻訳していけばいいのかを学ぶことができた。また、翻訳や文章を読んでいくことで文法などももう一度見直すことができた
- ・ 中国語で作文することで、中国語の自然な文章を作ることができるようになった
- ・ 中国語で作文を作る力がつきました
- ・ 中国語を話すことに自信がないのですが、この授業では楽しく話したり勉強したりすることができました
- ・ 中国語の日常的に使われるような自然な文法を学ぶことができた
- ・ 中国語の日本語翻訳やテーマに沿って中国語で作文する作業を踏まえた上で、先生からのア

ドバイスや指摘をもとに、より正しく自然な中国語の表現を学ぶことができました

しかし、具体的な実践活動、特に「書く」ことを重視した活動についてそれぞれどのような効果があるのかについては、これらのコメントからはわからない。そこで、後期授業の最終回にアンケート調査用紙を配り、実践例の「単語なぞなぞ」(通年)、「セリフ翻訳+添削」(前期)と「スピーチ+添削+質問応答」(後期)が作文力のアップに有効的であるかを答えてもらった(付録を参照)。答えは「非常にそう思う」、「ややそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の五段階に設定した。

対象学生は 25 名であったが、調査用紙は当日の回収ではなく、さらにコロナが拡大しており、最終回の欠席者に調査用紙が渡せなかったため、最終的に 19 名の学生からしか回収できず、回収率は 76%であった。

回収したアンケート調査用紙の評価を点数化した。「非常にそう思う」を 2 点、「ややそう思う」を 1 点、「どちらでもない」を 0 点、「あまりそう思わない」を -1 点、「そう思わない」を -2 点で計算すると、19 名で最高点は 38 点である。三つの活動に対して、19 名の学生からの評価を点数で表すと以下の通りになる。

表 3 実践活動の評価

学 生	スピーチ	単語なぞなぞ	セリフ翻訳	合計 (満点 6 点)
1	1	1	1	3
2	1	1	1	3
3	1	1	2	4
4	2	1	1	4
5	2	1	2	5
6	2	2	1	5
7	2	2	1	5
8	2	2	1	5
9	2	2	1	5
10	2	2	1	5
11	2	2	2	6
12	2	2	2	6
13	2	2	2	6
14	2	2	2	6
15	2	2	2	6
16	2	2	2	6
17	2	2	2	6
18	2	2	2	6

19	2	2	2	6
合 計	35	33	30	
(満点 38 点)				

上記の表で示すように、三つの実践活動における「作文力アップの効果」について、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」と「そう思わない」と評価する学生はいなかった。学生全員がどの活動でも作文力アップの効果があると答えた。三つの活動とも「ややそう思う」と評価する学生が2名いるのに対し、一つ以上の活動に「非常にそう思う」と評価する学生は17名おり、効果を実感した学生が大半を占めているといえよう（図2参照）。

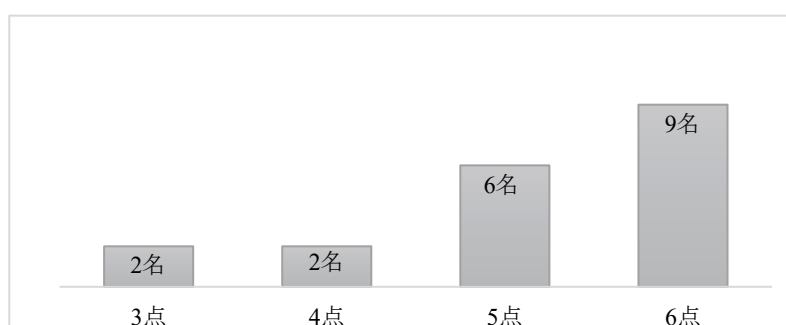


図2 評価人数分布図

3.2. 考察

本節では、三つのアウトプット活動について学生の評価と自由に記述してもらったコメントを「語彙力のアップ」、「文法・表現力のアップ」、「作文力のアップ」、「会話力のアップ」と「その他」の五つに分けて、学生の実感した効果を具体的に分析する。

3.2.1. 「単語なぞなぞ」

「単語なぞなぞ」が作文力を高める効果があるかに対しては、下の表が示すように、全員効果があると評価した。「非常にそう思う」と評価した学生は14名で、73.68%を占め、「ややそう思う」と評価した学生は5名で、26.32%を占めている。

表4 「単語なぞなぞ」についての評価

①非常にそう思う	②ややそう思う	③どちらでもない	④あまりそう思わない	⑤そう思わない
14名	5名	0名	0名	0名
73.68%	26.32%	0%	0%	0%

また、学生のコメントから「語彙」、「文法・表現」、「作文」、「会話」などのキーワードを見つけて3.2.の冒頭で示した五つに分類した。

① 語彙力 (+12)

- ・その単語だけでなく、作るときにはほかの単語も覚えることができる
- ・多くの単語を覚えることができ、作文で用いることができる
- ・普段でも使える中国語のフレーズが多く用いられる
- ・語彙力アップにつながる
- ・自然と語彙力が身についたと感じた
- ・関連する単語も同時に学べる
- ・普段まなでいない単語を沢山知ることができる
- ・新しい語彙を身につけることができる
- ・単語について理解が深まる
- ・単語とその意味を覚えることができる
- ・関連する語句を知ることができる
- ・語彙力が養われる

② 表現・文法 (+3)

- ・正しい文法事項を使って文章を書く練習ができた
- ・文の構造を理解することができる
- ・日頃の授業で習う文法などを使うことできる

③ 作文力 (+3)

- ・文章を作るきっかけになりました
- ・どのように作文するかを自分で考えて調べたりできる
- ・文章を構築する力を身につけられる

④ 会話力 (+3)

- ・単語をわかりやすく説明する力がつく
- ・簡単な言葉を説明するのが難しくて、頭を使った
- ・わかりやすく説明する能力が身につく

⑤ その他（聴く力・理解力・発音など） (+1)

- ・ほかの人が作った「なぞなぞ」を聞いて意味を理解する力を身につけることができた

以上のコメントからわかるように、「たくさんの単語を覚える」や「語彙力が身につく」などのようなコメントが多数寄せられており、それに関連するコメントが全部で 12 件もあった。実践活動の「単語なぞなぞ」から「語彙力のアップ」という効果を実感した学生は多かった。また、「作文力のアップ」、「文法・表現力のアップ」と「会話力のアップ」はそれぞれ 3 件あった。

3.2.2. 「セリフ翻訳」(前期)

「セリフ翻訳+添削」に対しても学生全員が作文力のアップに効果があると評価した一方で、下の表 5 で示されているように、「非常にそう思う」と評価した学生は「ややそう思う」と評価した

学生より3名多いが、11名しかいなかった。日本語のセリフを中国語に翻訳することは、学生にとって作文力のアップにつながるような直接的な効果があまり感じられていないようである。

表5 「セリフ翻訳」についての評価

①非常にそう思う	②ややそう思う	③どちらでもない	④あまりそう思わない	⑤そう思わない
11	8	0	0	0
58%	42.11%	0%	0%	0%

また、学生のコメントを分析すると、「文法を学べた」や「自然な言い回しが身に付く」などのようなコメントが多く、以下の5項目の中では「文法・表現」に関する知識を得ることができたと感じる学生が多くいたといえる。

① 語彙力 (+1)

- ・単語を覚えるだけでなく、自分でわからない単語やフレーズを調べることで覚え、記憶に残る

② 文法・表現力 (+10)

- ・文法を学ぶことができる
- ・自然な言い回しが身につく
- ・中国語と日本語での言葉のニュアンスや伝え方が違うので、中国語ではどのようにつかわれるのかなどを知ることができた
- ・より自然に表現することができる
- ・同じ意味でもニュアンスの違いや感情によって中国語の表現の仕方が異なってくるため、使い分けなども詳しく学ぶことができる
- ・日常で使える言い回しを学べる
- ・様々な表現方法を学ぶことができた
- ・自然な表現を学ぶことができる
- ・自然な中国語が身につく
- ・中国語の表現の幅が広がる

③ 作文力 (+2)

- ・作文力向上につながる
- ・作文だけでなく、読解と翻訳することが前と比べると苦にならなくなった

④ 会話力 (+4)

- ・普段の会話でも使える
- ・自然な会話から用法を学ぶことができる
- ・教科書には出てこないような日常会話をどう訳すかを学ぶことができた
- ・セリフは日常の会話に近い文章だからとても役に立つ

⑤ その他（聴く力・理解力・発音など）（+0）

学生のコメントからわかるように、「セリフ翻訳」は直接作文力のアップにつながるというより、多くの文法と表現を学ぶことができるということである。前期で文法と表現の基礎がしっかりと身につけば、後期でまとめた文章を作り、みんなの前で発表する「スピーチ」を行うための基礎ができるといえよう。

3.2.3. 「スピーチ」（後期）

「スピーチ」は作文力のアップに効果があるかという質問に対して、「非常にそう思う」と評価する学生は16名で、84.21%を占めており、「ややそう思う」と評価する学生を大幅に超えている。学生の評価から、三つのアウトプット活動の中で、「作文力のアップ」に直接つながり、一番効果のある活動は「スピーチ」であることがわかった（表6参照）。

表6 「スピーチ」についての評価

①非常にそう思う	②ややそう思う	③どちらでもない	④あまりそう思わない	⑤そう思わない
16	3	0	0	0
84.21%	15.79%	0%	0%	0%

学生のコメントからも「文章を書く力が身につく」、「長めの文章の作り方がわかる」、「作文力を身につけることができた」などのように、「作文力のアップ」を実感することができたとの内容が10件あり、五つの分類の中で一番多かった。

① 語彙力（+4）

- ・ 知らなかった単語を学ぶことができる
- ・ みんなの発表するテーマによっていろんな単語に触れることができる
- ・ 単語の力も身につけることができました
- ・ 自分のことを文章にするため単語が身につくやすい

② 文法・表現力（+7）

- ・ 正しい文法を学ぶことができた
- ・ 正しい文法を身につけることができる
- ・ 自分が作った文をどのように直すのかがわかる
- ・ 知らなかった表現を学ぶことができる
- ・ 自分の話したい内容を添削して下さったことで、ほかのパターンになったときでも応用できる
- ・ 表現の仕方が身につく
- ・ さまざまな表現の仕方を学ぶことができた

③ 作文力 (+10)

- ・自分で文章を書く力が身につく
- ・自分が興味のある話題だからより書く力がわいてきたし、添削をすることでまちがいを理解し、より正確な中国語の文章を書くことができる
- ・作文力のアップに有効だと思う
- ・ほかの人の発表を聞くことで自分だったらこうするかな、なども考えることができ、様々な文章の作り方を学ぶことができる
- ・長めの文章を作る練習になりました
- ・好きなことを書くので、より書く力を身につけやすい
- ・作文力を身につけることができた
- ・今まで習った文法や単語をもとに自分で文章を考えることができた
- ・よく考えて文を作るきっかけになる
- ・自分が文章を考え、声に出すことは言語を習得するうえで最も大切だと考える

④ 会話力 (+4)

- ・自分の言いたいことを伝える力が上がる
- ・これから話す際に、これまでやってきたスピーチが役に立つと思うし、ほかの人にどんな質問をしたいか考えることができた
- ・話したいことを正しく伝えるためにとっても役立つと思う
- ・アウトプットにとっても有効的だと思う

⑤ その他（聴く力・理解力・発音など）(+1)

- ・発音の力を身につけることができた

また、上記のコメントからわかるように、「正しい文法を学ぶことができた」や「知らなかった表現を学ぶことができた」など、文法と表現に関するコメントも7件あった。また、語彙力と会話力に関するコメントもそれぞれ4件あり、「スピーチ」実践活動は、作文力のアップだけでなく、語彙量の増加と会話力の向上にも効果があるとみられる。

3.3. 結果

アンケート調査から2021年度の「中国語表現法」の授業で実施したアウトプット実践活動の「単語なぞなぞ」、「セリフ翻訳」、「スピーチ」はいずれも「作文力のアップ」に効果ありとの結果が得られた。以下の表7からもわかるように、三つの活動とも均等に作文の向上につながるというわけではなく、直接機能するのは後期で実施した「スピーチ」活動であった。

表7 アウトプット実践効果への実感（コメント件数）

	単語なぞなぞ	セリフ翻訳	スピーチ
① 語彙力のアップ	12	1	4
② 文法・表現力のアップ	3	10	7
③ 作文力のアップ	3	2	10
④ 会話力のアップ	3	4	4
⑤ その他	1	0	1

前期で実施した「セリフ翻訳」は「まとまりのある文章を書く」能力の向上に直接的な効果があるとは言えないが、文脈に合わせて一文一文をより正確に、且つ自然に表現することができるようになったといえる。通年で実施した「単語なぞなぞ」は作文力の向上に直接的な効果は大きくないが、学生のコメントからもわかるように、作文に必要な語彙力の向上につながっている。

また、三つの活動とも「書く」だけではなく、書いたものを相手に伝えるように話してもらうため、「話す」も含めたアウトプットを取り入れた。そのため、学生から「会話力の向上」につながるようなコメントも寄せられた。

4. おわりに

作文の授業とは言っても「話す」練習を省いて、「書く」だけに終始するのではなく、自分の書いたものを声に出して伝えることも「作文力の向上」につながると考えられるため、今回の授業ではアウトプット活動を全面的に行うように授業をデザインした。アンケート調査から、本稿で取り上げたアウトプット実践活動に対して、学生全員が「作文力の向上」に効果があると実感したことが明らかになった。

他方、作文の練習として実施した前期の「セリフ翻訳」は、多くの学生にとって「作文力の向上」にはつながるものの、単文の翻訳と同じく文法と表現を習得したという実感のほうが大きかった。今後はセリフではなく、物語やまとまりのある文章を翻訳する場合の効果も検証する必要があると思われる。また、今回のアンケート調査からは一年間の授業を通して具体的にどの程度作文力が向上したかは評価できなかった。実施前と実施後にテストを実施して分析すべきであると考ええる。

注

1 例えば、西（2021，p.224）では次のように指摘されている。

日本の大学における中国語教育は、全体的には、いまだに文法訳読法（文法と語彙学習）、オーディオ・リンガル教授法（Audio-Lingual Method。反復練習、構造中心の文型練習、機械的やりとり、暗唱）が席卷している。

- 2 共通教育科目「中国語Ⅰ」では福岡大学中国語教科書研究チームが編著した『漢語課本』が使われている。王 (2016) によれば、語彙数は 580 語程度である。
- 3 HSK とは、中国政府教育部の直属機関である“国家汉语国际推广领导小组办公室”（略称：国家汉办）が主催し、中国政府が認定する中国語に関する検定試験のことである。
- 4 《国际汉语教学通用课程大纲》(International Curriculum for Chinese Language Education) (2014) は、第二外国語としての中国語の学習指導要領であり、中国語の能力を 6 レベルに分けており、HSK の定めたレベルと一致している。また、CEFR (「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠」) のレベルと対応している。
- 5 表 1 の日本語訳は筆者による。
- 6 HSK4 級の語彙表は、“汉语考试服务网” (<http://www.chinesetest.cn>) からダウンロードしてピンインと日本語訳をつけて学生に配った。
- 7 この四つの機能について、鈴木・齋藤 (2016, p.224) では、それぞれ次のように説明されている。
 - 気づき：学習者が表現したいことと表現できることとのギャップに気づき、自身の知識に穴があることに気づく。
 - 仮説生成と検証：自身の知っている知識を総動員して仮説を立てて表現し、その仮説が相手に通じるかどうかを試す。
 - メタ言語的熟考：表現したい内容をどのような言語形式で表すのかを意識的に考えること。
 - 自動化：アウトプットを繰り返すことにより知識へのアクセス速度が上昇し、流暢な言語処理が可能となる。
- 8 FURIKA は“Fukuoka University self-Reflection Index of Knowledge, Abilities, and Attitudes”の略称で、福岡大学の全科目で実施する Web による授業アンケートのことである。

付録

授業アンケート調査問題

1. 「単語なぞなぞ」は、作文力のアップに有効的だと思いますか。
 - ①非常にそう思う ②ややそう思う ③どちらでもない ④あまりそう思わない ⑤そう思わない
 その理由を書いてください。

2. 前期の「セリフ翻訳+添削」は、作文力のアップに有効的だと思いますか。
 - ①非常にそう思う ②ややそう思う ③どちらでもない ④あまりそう思わない ⑤そう思わない
 その理由を書いてください。

3. 後期の「スピーチ+添削+質問応答」は、作文力のアップに有効的だと思いますか。
 - ①非常にそう思う ②ややそう思う ③どちらでもない ④あまりそう思わない ⑤そう思わない
 その理由を書いてください。

4. ほかに授業にやってほしいことがあればご自由にお書きください。

5. そのほかに感想があればご自由にお書きください。

参考文献

- 王毓雯 2016, 「初級中国語教育で必要とされる語彙とその特徴—福岡大学の統一教材『漢語課本』を素材に」, 『福岡大学研究部論集 A: 人文科学編』第 15 巻 2 号, pp.29~44
- 謝平 2020, 「中国語専攻における初級段階の学習語彙について—新 HSK4 級語彙リストにおける活用の可能性をめぐって」, 『福岡大学人文論叢』第 52 巻第 1 号, pp.285~298
- 謝平 2020, 「中国語の入門授業におけるコミュニケーション能力育成の試み」, 『福岡大学研究部論集』(人文科学編) 第 20 巻第 1 号, pp.85~92
- 城一道子・鈴木哲平・大山 健一 2018, 「インプットからアウトプットへ—コミュニケーション能力育成に向けた大学基礎教養英語教育の試み」, 『江戸川大学紀要』第 28 号, pp.73~84
- 鈴木渉・齋藤玲 2016, 「第二言語学習におけるアウトプットの効果に関する研究の課題と今後の展望—認知心理学の観点から」, 『宮城教育大学紀要』第 50 巻, pp.223~230
- 田口亜紀 2019, 「大学での外国語教育の目的は技能の習得か—日本学術会議の参照基準と欧州評議会 CEFR 複言語主義から見る 2 つの英語と外国語」, 『共立女子大学文芸学部紀要』第 65 巻, pp.47~61
- 中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会 2007, 『中国語初級段階学習指導ガイドライン』, pp.4~38
- 西香織 2021, 「大学中国語教育の現状と実践、そして課題」, 『外国語教育研究ジャーナル』第 2 巻, 立教大学外国語教育研究センター, pp.224~229
- 村野井仁 2011, 「アウトプットと第二言語習得」, 『東北学院大学論集 (英語英文学)』第 95 号, 東北学院大学学術研究会, pp.51~64
- 松沢伸二 2010, 「多量のインプットで英語力を育む」, 『Teaching English Now』第 19 巻, 三省堂, pp.2~5
- 山下治之・平川八尋 2010, 「強制アウトプット重視の第 2 言語指導法」, 『専修大学外国語教育論集』第 38 号, 専修大学 LL 研究室, pp.107~119
- 横山紀子 2004, 「言語習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割—単語の習得調査の分析から」, 『日本語国際センター紀要』第 14 号, pp.1~12
- 孔子学院总部 2014, 《国际汉语教学通用课程大纲》(修订版), 北京语言大学出版社, pp.1~35
- 张新生・李明芳 2019, <汉语能力标准比较初探>, 《国际汉语教学研究》第 1 期, pp.31~47